

特集

老後に生き生き暮らせる地域へ海外編

●リタイア後の海外暮らしが人気の理由(わけ)

「ハッピーリタイアをして悠々自適に海外で暮らす」。まるで夢のような話に聞こえるが、気力体力のある一時期を海外で過ごす日本人リタイアリーがこのところ増えている。ツリーズムマーケティング研究所の調べによると、「ロングステイ」と呼ばれる2週間以上の海外長期滞在者数は10万人程度(2004年)、2010年には15万人の市場規模になると推計されており、団塊世代を中心に潜在ニーズも高まりをみせている。

とは少なくない。また、長年培った技術やノウハウを、ボランティアというスタイルで異国の地で活かすひとも増えている。

そもそも欧米では、「定年」という概念がないため、自らが引退の時期を定め「ハッピーリタイア」をする。リタイア後をより豊かに過ごすため、気候が温暖で物価も低く暮らしやすい国や地域へ老夫婦が移住をするのもポピュラーなことだ。そうした「第二の人生」への門出を、家族そろって温かく祝う習慣や考え方は、今の日本へも流入し始めているのかもしれない。

多くのひとに取材をして実感したのは、ロングステイや海外移住を成功させているリタイアリーの多くが、「前向き」で「気持ちが良い」という

こと。駐在や留学経験者に限った選択肢かと思いきや、海外生活の未経験者も少なくなく、いくつになってもチャレンジ精神を忘れない姿勢に心を打ち碎かれることもある。

平均寿命が続伸し、世界一の長寿大国となつてから、「人生の後半戦をどのように過ごすか」が一大関心事となつている。海外というあらたなステージで「自分らしく生きたい」とするリタイアリーが増えるのも、日本人のライフスタイルの多様化が遠因しているのかもしれない。

●どこの国を選ぶ?人気の滞在先ベストテン

こうした海外暮らしブームの背景には、アジアを中心とした各国が「リタイアメントビザ」の制度を積極



●旅行作家
千葉 千枝子
ちば・ちえこ

中央大卒業後、富士銀行入行。シテイバンクを経て、JTBに入社。96年有限会社を設立。ロングステイの普及・啓蒙に伴う執筆、講演活動を行う。日本旅行作家協会会員・フアイナンシャルプランナー・総合旅行業取扱管理者・オールアバウト海外移住サイトのガイドを務める。著書に「悠々パース暮らし」(総合ユニコム)、「ハワイ暮らしはハウマツチ?」「悠々ロングステイガイド台湾」(イカロス出版)、「カナダバンクーバーロングステイ術」(JTBパブリッシング)ほか多数。

《表1》ロングステイ希望調査

(財)ロングステイ財団調べ

ベスト10	1993年調査	2000年調査	2005年調査
第1位	ハワイ	オーストラリア	オーストラリア
第2位	カナダ	ハワイ	マレーシア
第3位	オーストラリア	ニュージーランド	ハワイ
第4位	米国西海岸	カナダ	ニュージーランド
第5位	ニュージーランド	スペイン	タイ
第6位	スイス	イギリス	カナダ
第7位	イギリス	スイス	スペイン
第8位	フランス	イタリア	イギリス
第9位	スペイン	米国西海岸	米国本土
第10位	米国東海岸	マレーシア	フィリピン/フランス

《表2》リタイアメントビザ（退職者査証）制度のある国

マレーシア ノービザ3カ月	50歳未満 50歳以上	保証金30万RMの預金(1年経過後24万、最低6万RM) 保証金15万RMの預金or月1万RMの所得証明 (1年経過後9万、最低6万RM)	10年
タイ ノービザ30日間	50歳以上 60歳以上	80万Bの預金/月6.5万B or 年80万Bの所得証明 月15万円以上の所得証明	1年 90日
フィリピン ノービザ21日間	35歳以上	(1) 年金等の受給が月額800米ドル以上の場 合：50歳以上は1万米ドル (2) 年金に関係なく申請する場合：50歳以 上は2万米ドル/35歳以上50歳未満は5万米	制限 なし
オーストラリア イータス3カ月間	55歳以上	75万豪ドルの資産提示+65000豪ドルの所得 証明+75万豪ドルの債券投資(都市圏)	4年
台湾 ノービザ30日間	55歳以上	5万米ドル以上の資産提示	180日
中南米	年金受給者	メキシコ・コスタリカ・グアテマラ・ブラジル等 国により異なる	—
ヨーロッパ	60歳以上 or 年金受給者	スイス・イギリス・ポルトガル・スペイン 何らかのつながりがあるひとであればOK	—

的に導入していることにも由来する。ある一定の財政条件や健康条件、無犯罪証明などをクリアすることで、まとまった期間をその国で滞在することができると。国によっては、観光施策や外貨獲得目的の意味合いで導入しているところもある。近ごろの

日本の年金不安が追い風となり、物価が低いアジアの国々に暮らすことで「生活防衛」するひともあるから、今後はますますニーズも高まることだろう。

ちなみに、ロングステイ財団が毎年発表する「ロングステイ希望滞在国調査」(表1参照)では、例年オーストラリアが首位を独走している。ほかにも、カナダやハワイ、ニュージーランドといった多民族国家が上位を占める。これら西側諸国人気は衰えることがないが、長期滞在のビザがとりづらいこともあり、滞在者

の多くは、観光や短期商用目的の「観光ビザ」か「ノービザ(査証免除)」で許可される期間の範囲内、現地で滞在し、日本と往き来をしているのが現状だ。

また、アジア域内では、10年間の滞在が可能なリタイアメントビザ制度を導入するマレーシアが第二位につけており、タイやフィリピンなどもベストテン入りしている。いずれの国もリタイアメントビザ制度があるのが特長だ。現地での暮らしに水が合い、もっと長く滞在をしたいと考えるようになると、これら長期滞在ビザの取得に踏み切るケースが一般的だ。近年、アジア人気の台頭ぶりはめざましく、人的交流も活発化している。

リタイアメントビザ取得で気をつけたいのは、資産や所得の提示ないしは一部資産の移動を伴う点である。受け入れる国の側からしてみれば、医療面でのリスクが高く、仕事をもたない異国の中高年齢者を長期で受け入れるわけだから、相応の資産を有していることを取得条件にしてリスクヘッジしている(表2参照)。

しかし、こうした特別なビザを取



得することで、不動産取引やその他現地への投資に既存する「外国人規制」が緩和されたり、高い関税が撤廃されるといった恩恵もあるから、取得に踏み切るひとはあとを絶たない。

日本円が主要国通貨のなかで過去最弱といわれている今、退職金の一

世代を越えて人気のハワイで暮らすように過ごしたい人が増えている。(画像提供：千葉千枝子)

部を外貨投資にあてるひとも増えている。海外への資産移動の関心は高い。現地に滞在しながら、直接、金融機関の門戸を叩き、その国の国債や株式に投資をするひとも現出している。

「終の棲家」とはならずとも、人生の一時を過ごすのであれば「好きな国、憧れの国」を選ぶことをお

すすめする。また、物価の低いアジアで優雅な暮らしを夢見て移住したところ、

イメージとあわず失敗した

「年金難民」も散見する。

国際人としての思慮に欠く

言動で「お騒がせ」となっ

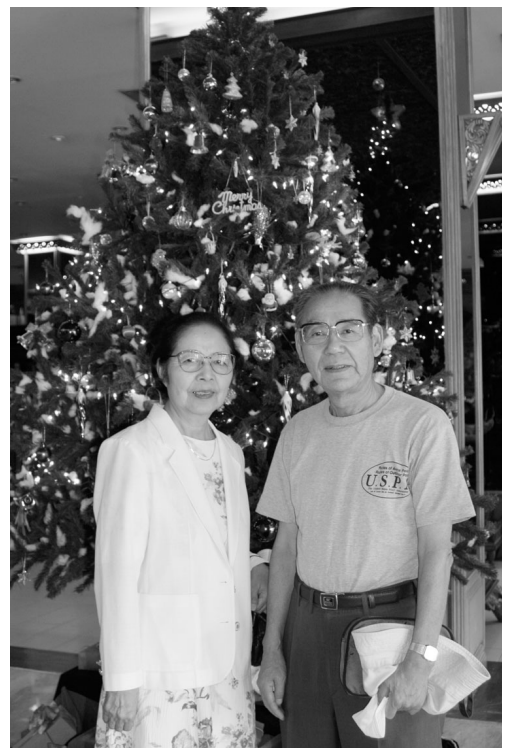
たケースもあり、見識が問

われ始めているから注意を

したい。

● エンジニアだった父の台湾ロングステイが契機に

ロングステイや海外移住をテーマに執筆や講演活動をしているが、こうした取り組みをライフワークにしようと志したきっかけは、



タイのチェンマイでロングステイをする日本人夫婦—クリスマスツリーが飾られてた冬でも半袖で過ごせるのが人気の理由。(画像提供：千葉千枝子)

実父の台湾ロングステイにある。

自動車メーカーのエンジニアだった父は、高度経済成長期以降、欧米

を中心に出張が多く帰宅も遅い仕事

人間だった。退職後しばらくして、

縁もゆかりもない台湾で「簡単な技術指導をしてくれないか」という話

しが舞い込み、月の半分を台湾で過

ごす生活が始まった。日本と往來を

繰り返す父の姿は若々しく、娘の目

にもいきいきと映った。

旅行業界に長らく籍を置き、とき

には添乗員として世界各国を旅した

経験があったから、「近い将来、父の

ように海外で長期滞在をする日本人

シニアが、きつと増加するだろう」

と考えはじめたのが、ライフワークに至った経緯だ。

三年前に実母が他界したおりに、

海を渡って多くの台湾のひとたちが

吊間に駆けつけてくれた。友情を育

み、草の根レベルではあるが日台の

架け橋となった父をみるにつけ、人

生とは何かを深く考えるようにな

った。

最近では、企業の再雇用制度も充

実してきたから、団塊世代の第二の

人生は豊富な選択肢のなかで、ます

ます多様化することだろう。とはい

え活躍のステージがグローバル化する

ことは、間違いないと筆者はおも

うのである。